

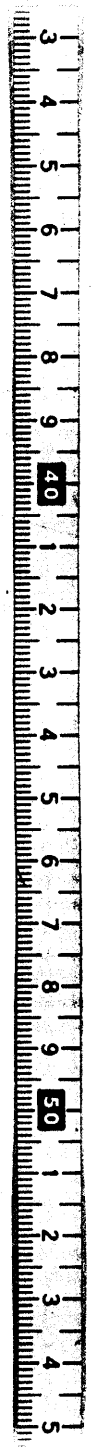
黄塵と珊瑚屋

独立歩兵第二十一大隊
第三中隊の記録



沖
繩
344

3



黄塵と珊瑚礁 (リ 一 乙)

— 独歩第二十一大隊第三中隊の記録 —



独混第六旅团第二十一大隊幹部將校



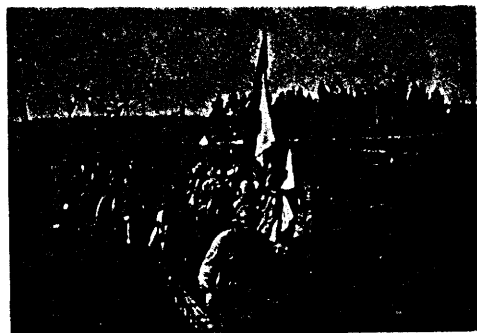
魯中作戰 (山東省中部地区)

華北戰線



独歩第二十一大隊第三中隊長（初代）
小竹 実（まこと）大尉
第二中隊長として昭和18年4月13日山東省
中部地区林宅（田柳庄附近）において戦死

独歩第二十一大隊長（第四代）
西林鴻介中佐（後方馬上）
昭和20年6月22日沖縄本島島尻地区に
おいて戦死



魯中作戦



独歩第二十一大隊長（第三代）
引地 俊二 中佐
昭和18年4月13日山東省中部地区田柳庄
附近の戦闘にて戦死

独歩第二十一大隊長（第二代）
橋場 帝次 中佐



魯中作戦 昭和17年7月山東省中部（左端 織田直澄兵長）



独歩第二十一大隊第三中隊附
沼澤 幸一 准尉



独歩第二十一大隊第三中隊附
栗山 隆吉 中尉



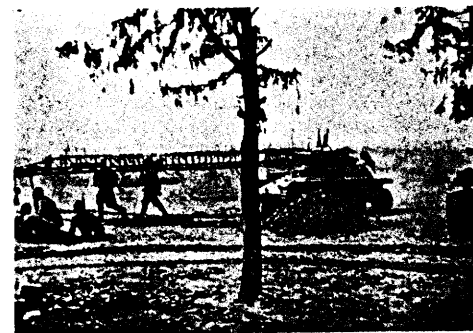
独歩第二十一大隊第三中隊長（代理）
金森 正典 中尉
昭和20年4月沖縄本島仲西飛行場附近
において第二中隊長として戦死



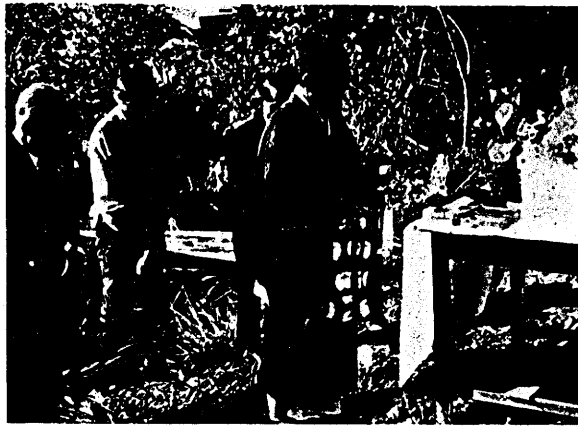
独歩第二十一大隊第三中隊長（二代）
松見 巳之吉 中尉



魯中作戦



魯中作戦



伊祖高地における第三中隊慰霊祭（昭和45年12月18日）左端長澤文雄大尉ご令兄 長澤泰治様 中央田原惟信師



遺骨発掘に協力された
伊祖部落婦人会長
銘 苅 初 子 様



第三中隊遺骨発掘に協力された
伊祖部落自治会長
銘苅盛一様ご夫妻



25年目に発掘された第三中隊ご遺骨
（琉球政府民生部援護課）



遺骨発掘に協力された琉球政府援護
課長代理 徳田安全様



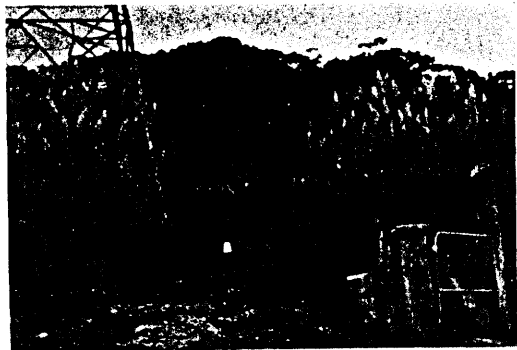
伊祖高地の登り口
（昭和45年12月撮影）



元第二十一大隊大隊本部医務室壕の入り口
(昭和45年12月撮影)



野田 忠 夫 兵長
昭和20年4月20日伊祖夜襲において戦死



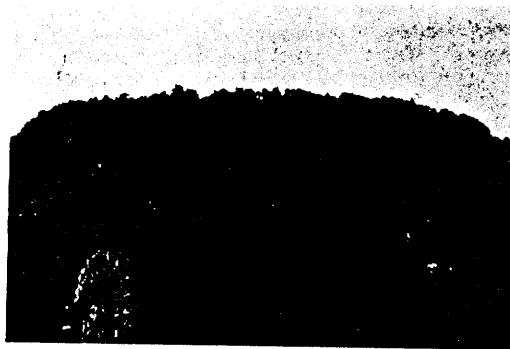
現在の伊祖高地 (昭和45年12月撮影)



鈴 木 昇 軍曹
昭和20年4月20日伊祖夜襲において長澤
中隊長と共に戦死



独歩第二十一大隊第三中隊長 (第五代)
長 澤 文 雄 大尉
山東省濰州附近の演習場において



第三中隊長玉碎の伊祖高地 (昭和36年7月撮影)

沖
繩
戦
線

本記録を独歩第二十一大隊第三中隊の
戦没諸霊、並びにご遺族に捧げる。

— 第三中隊生存者一同



第三中隊遺骨伝達式（昭和45年12月19日）
（長澤泰治様 琉球政府援護課において）



第三中隊遺骨伝達式（全）
（織田直澄 第三中隊生存者代表）

序 文

長 澤 泰 治

この度、独立混成第六旅団独立歩兵第二十一大隊第三中隊の記録が、中隊生存者の皆様によって発行されますことは、遺族の一人として心から喜びに耐えない所であります。

先日、編集委員会から、亡き戦友達の事蹟を明らかにしてご遺族をお慰めするため中隊の記録を発行したいが、その序文を草するようにとのお誘いを賜りました。

弟、長澤文雄が最後の第三中隊長でありました縁故から、或はご依頼を辱うしたものと存じます。本来中隊長は中隊員の柱であり、兄であります。また戦闘の責任者でもあります。ご依頼に応ずるには些か躊躇を禁じえないのですが戦後三句に近い今日でもございますので、敢えて執筆の榮を荷わせて戴きました。

第三中隊は、華北戦線で精銳をうたわれた独歩第二十一大隊の中でも、特に精強をもって鳴る中隊であったと伺っております。

その為か、中隊は常に困難な戦闘の第一線を担当し、ご承知のように實邊万丈の広野、山また山の華北戦

線から、遠く東シナ海を南下して玉碎の島沖繩本島まで、あの永い苦しい戦争をまさに血と汗で戦いぬかれて来たのであります。それは私共の想像を絶する、千辛万苦の軍旅であつたらうと存じます。

中隊生存者の皆様が初めて戦友の供養を思い立たれたのは、戦後一、二年の頃と承っております。以来、名古屋市の日泰寺において毎年中隊慰霊祭が執り行われておりますが、本年はその二十四回目を迎えます。

私も日泰寺の慰霊祭に参加し、ご遺族の方々が遠近からお集りになり、仏前に合掌されるお姿を拝見して無量の思いに打たれたことがございます。

一昨年十二月、私は中隊有志の方のお伴をして沖繩本島伊祖高地の戦跡へ参り、琉球政府厚生局の徳田安全様、伊祖部落自治会長の銘刃盛一様、婦人会長銘刃初子様はじめ、部落の方々の全面的な協力の下に弟を含む中隊五柱の収骨をいたし、慰霊祭を営んで参りました。これも中隊生存者の皆様の厚い戦友愛によって、実現をみたわけでございます。

この記録が、今は亡き戦友の方々へのご慰霊の玉串となり、またご遺族にとっては亡きご子弟、ご主人、ご兄弟の在りし日を偲ぶ心の糧となることをお祈りして、序文にかえさせていただきます。

合 掌

本書の編集に当られた編集委員の皆様、篤くお礼を申しあげます。

目次

写真(臺北戦線、沖繩戦線).....長澤 泰治.....2

序 文.....長澤 泰治.....6

獨立歩兵第二十二大隊略史.....6

臺北戦線.....17

北支における第三中隊.....松見巳之吉.....19

第三中隊三千の敵と交戦.....上木 喜隆.....23

三の隊の襲(しつけ).....吉田 広繁.....31

馬鞍山の戦闘.....足立 泰造.....34

黄塵と卵.....水野 史朗.....39

沖繩戦線.....49

沖繩における独立歩第二十二大隊戦闘概報.....51

天号作戦と長澤隊.....53

伊祖四十八高地.....織田 直澄.....61

伊祖夜襲前後.....鈴木 義正.....72

ああ、五十九高地.....井土 邦一.....77

沖繩戦線五月中旬.....須崎治良八.....86

座談会「第三中隊を語る」.....第三中隊生存者.....89

第三中隊慰霊祭について.....堀 賢次.....111

編集を終って.....112

長澤隊戦没者名簿(折込み).....120

編集後記.....120

装丁 井土 邦一

独立混成第六旅団 独立歩兵第二十一大隊略史

第三中隊の記録編集委員会

独立混成第六旅団が、華北河南省開封において、創設されたのは昭和十四年一月——シナ事変第三年目のことである。

昭和十二年七月七日、蘆溝橋に起った北支事変は忽ち中国全土に波及拡大し、日本軍は南京、武昌、漢口、広東、重慶と逐次中国軍を圧迫して、昭和十三年の末には武力既定作戦を終了した。

そこで昭和十四年の初頭から、華北においては全占領地区の治安警備に手を着けることになり、独立混成第六旅団が、この時期に誕生したのである。

この年から北支派遣軍は、山東省、山西省、河北省の要部に治安化を推進し、いわゆる「肅正建設」計画を実施して積極不断的討伐作戦を行なうことになるが、これは「一点」と「線」の占領地を「面」に拡大しようとする作戦行動であった。当時の編成と兵力は次の通りである。

北支方面軍
直轄(一個師二旅)
第一軍(二個師一旅)
第十二軍(一個師二旅)
これに対し、華北一帯に布陣する中国軍は、国府軍(重慶軍)二十五万、共産軍十二万、その他の不正規軍を合算して、約五十九万の兵力量であり、北支派遣軍は六分の一の兵力量をもって治安戦を戦うことになる。

独立混成第六旅団は創設の折、右の第十二軍に所屬し、国府軍、中共軍を追って昭和十八年の夏まで華北一帯の討伐作戦を戦うが、同年七月「太行作戦」を契機に旅団の編成が解かれ「第六十二師団」と改まる。

そして十二軍の隷下から一軍に移され、太行山脈中に重慶軍を攻撃する。

翌昭和十九年三月、支那方面軍は北支と仏印を結ぶ大陸

打通作戦を敢行することになり、師団はもとの十二軍に編入され、重慶軍を追って黄河を渡り、主攻兵団として霸王城陣地を攻撃、更に黃崗店、洛陽と敗敵を追撃して蘆氏に突入する。これが七月初旬。

そこで方面軍命令に接するや、師団は再び強行軍をもって河南省開封に復帰し、七月二十二日、突如として第三十二軍(沖繩本島防衛軍)に編入される。方面軍命令は、沖繩作戦参加のための集結命令であった。所屬のかかわること三回、作戦地の変更二回(北支、沖繩)、この師団程転々と移動した集団も珍しいのではあるまいか。

独立歩兵第二十一大隊は、独立混成第六旅団、第六十二師団の中核大隊の一つとして、文字通り旅団、師団と命運をともにした大隊である。

戦線重畳する華北にあっては国府軍、中共軍の討伐戦を最前線で戦い、沖繩本島南部地区においては、真っ先きに米上陸軍を迎え撃って猛烈果敢な戦闘を続け、米軍の心胆を奪い去ったのも玉碎をとげた。

転戦に次ぐ転戦ののち、孤島の戦闘に敗れ去ったとはいえ、大隊の歴史は勇兵の戦史を展開する。

それは、常に大隊の第一線を戦って来た、第三中隊の戦史でもある。以下、北支における大隊の成立から、沖繩における玉碎までを点綴する。

独立混成第六旅団(通称号「秋」)は昭和十四年一月十四日、軍令陸甲第一号により臨時編成を下令され、同年二月十二日編成を完結した。

旅団の編成は「独立歩兵第二十一大隊」「独立歩兵第二十二大隊」「独立歩兵第二十三大隊」「独立歩兵第二十四大隊」「独立歩兵第二十五大隊」の五個大隊に、三個中隊の砲兵隊、工兵隊、通信隊を配属した。編成当初の留守担当部隊は、留守第十六師団(京都)。のち、留守第三師団(名古屋)に移管された。

初代旅団長は土屋兵馬少将。次に山田鉄二郎少将、盤井虎次郎少将、奥村半二少将に交替した。(のち、第六十二師団に改編)

独立歩兵第二十一大隊は、当時北支に駐留していた独立歩兵第六大隊を基幹として編成された。

百六大隊は昭和十三年十月三十日北支に於て編成、翌十四年一月十四日内地復員となり、部隊名を失なうに到ったので、新たに同大隊の人員を根幹として、独立歩兵第二十一大隊が編成されたものである。

昭和十四年二月、蘆溝橋の鉄道警備、沿線の治安維持を目的として華北河南省開封において創設され、大隊員は

部隊長山崎義夫大佐以下六百五十名（四個中隊）であった。当時旅団は司令部を山東省呂県に置き、大隊は開封に大隊本部を置いて西離海線の警備を担当した。初代部隊長山崎大佐の後に、橋場帝次中佐を迎えた。

（当時、第三中隊長は小竹憲中尉。駐屯地は野難崗。小竹中尉は、第二中隊長に補せられ昭和十八年四月戦死）昭和十二年七月、蘆溝橋に起った日中両軍の衝突は、北支事変からシナ事変に拡大し、蒋介石の國民政府は日本軍進撃の前に南京、漢口、重慶と逐次後退を続けたが、之にかわって急速に北支派遣軍の前面に登場したのが中共軍である。中共軍は昭和十三年以降華北方面に滲透し、昭和十五年八月には「百団攻勢」を唱えて、主要地区に抗日戦の根拠地を構築した。

北支方面軍は昭和十四年真正建設計画を策定し、年を追って中共勢力の削減に努めたが、その最も充実した年が昭和十六、十七年の兩年であった。（戦史叢書「北支の治安戦」より）

この時期、華北方面には日本軍、中共軍、国府軍の三勢力が鼎立し、大隊の戦闘行動は占領地帯の治安を攪乱する中共軍及び国府軍に向けられ、山東省、河北省、山西省、河南省一帯にわたって掃蕩作戦を展開した。

昭和十六年十二月

大隊は作戦命令に基き河南省開封より山東省桓台县張店に移駐した。十二月九日開封出發。十二月十日張店着。同地附近の警備に当る。

十二月二十日より二十七日まで、第二次清水泊地区剿共作戦に参加し、中共軍徐向前集團と交戦した。

この月、部隊長に陸軍戸山学校教官引地俊二中佐を迎え、部隊長以下九百五十名となる。

（第三中隊長は松見巨之吉中尉。駐屯地は張店）十二月八日、大東亜戦争開戦。

昭和十七年一月

昭和十六年度徵集兵入隊を契機に、大隊は編成を強化し中佐一、中、少尉四十、准尉五、下士官以下一千（四個中隊）となり、大隊の装備は聯隊砲二、大隊砲二、重機関銃八、馬匹四十頭を配備された。

これより大隊は華北の戦野に野戦討伐部隊として発足。兵営に起居することは殆んどなく、専ら民家或は原野に伏し中共軍を追って掃蕩作戦に専ら日々を送った。

大隊は第十二軍司令官土橋一次中将創案になる「完全包圍戦法」を実施して戦果を上昇せしめ、精強部隊の盛名は華北一帯に轟いた。

大隊はこの年一月二十七日より三月六日まで魯中（十号）作戦に参加し、山東省博山南東方の山岳地帯に重慶軍魯

蘇戦区司令于学忠軍を撃破、包圍網を圧縮して敵本拠施設を覆滅した。（歩兵十九個大隊参加）

続いて、三月十八日より四月九日まで魚中掃蕩作戦に参加し、更に四月十六、十七日には博興、高苑地区に中共軍、八路軍山東従隊を討伐。四月二十一日より二十四日まで、八路軍を追って益北地区作戦に参加した。

更に四月二十九日より五月四日まで第二次冀南作戦（十二号作戦）に参加し、軽快な移動による包圍網の構成、敵脱出の間隙防止、黄蘆の利用による急襲等によって、国府軍第三十九集團軍（総司令高樹勳）を撃破し、また中共軍冀南地区、根拠地にも打撃を与えた。

（註 作戦名「魯」は山東省の意。魯中は山東省中部、冀は河北省の意。冀南は河北省南部）

昭和十七年五月

大隊は第三十二師団の、浙贛作戦参加に伴なり中支転進により、五月四日、山東省臨沂県沂州に移駐。炎熱の下に同地区の警備を担当した。（註 浙は浙江省、贛は江西省）七月一日、再び討伐作戦に出動、二十一日まで国府軍第十二師と交戦。この日より青駝寺において警備に就く。

昭和十七年八月一日

（第三中隊長松見中尉、久留米第一陸軍予備士官学校生徒隊附となり、川本芳雄中尉、第三中隊長に補職）

昭和十七年九月

大隊は九月二十七日より十月五日まで東平湖西方剿共作戦に参加し、山西省魯西地区の中共軍第百十五師（師長・林彪）教導第三旅を包圍急襲して著大の戦果を収めた。

昭和十七年十一月

大隊は十一月九日より十二月二十九日に至る間、第三次魯東作戦（と号作戦）に参加。山東省博山馬鞍山において、共産軍山東従隊第四旅を攻撃した。

馬鞍山は屏風岩の急峻が重なり、一キロの尾根を形成する博山馬鞍山の要害。

敵は山脚から中腹を連結する三個の樓門と、屹立する絶壁によって我を猛射し、手榴弾、木材、机、水壺を投下して進撃を阻んだ。第三中隊は大隊の第一線となって第一、第二、第三樓門を突破し、七十度の屏風岩を人梯子によって攀登、敵中に突撃して之を占領した。

この戦間、第三中隊長川本芳雄中尉戦死。（金森正典中尉、第三中隊長臨時代理を命ぜられる）

大東亜戦争の南方作戦によって、在支日本軍戦力は逐次南方へ抽出輸送された。この時期においても十三個師団が移動したため、その間隙を衝いて中共軍の進入は一層活発となり、同時に国府軍、中共軍の相撃も随所に行われて、華北戦線は漸く複雑な様相を呈してくる。

昭和十八年一月

大隊は一月七日から寿光(益都北東方三十軒)附近において、国府軍保安第百十三師第十五旅を包囲撃滅した。更に第五十九師団と協力して一月十五日大王府附近に中共軍(清河軍区)を急襲し潰滅的打撃を与えた。

(この戦闘において第三中隊鈴木昇兵長、近藤一夫、杉浦清而上等兵は率先して敵中に突入し、武装解除に成功。大隊長より感状を授与された)

昭和十八年四月十三日

山東省中部地区田柳庄附近の討伐戦において、独歩第二十一大隊長引地俊二中佐戦死。

昭和十八年六月三十日

動員下令により「独立混成第六旅団」の編成を解き「第六十二師団(通称号「石」)を編成。師団長、本郷義夫中将。大隊は行軍をもって山東省呂県を出発。長駆して山西省澤州に移駐した。部隊長に西林鴻介中佐を迎え、大隊員は七個中隊一千四百名。

大隊本部、第二中隊、歩兵砲中隊、機関銃中隊を澤州に、第一中隊を高平、第三中隊を陵川、第四中隊を陽城、第五中隊を蘭少鎮に分駐せしめ、約三百軒平方の治安維持に当ると共に、海拔一千六百メートルの太行山脈中に昼夜間断なき討伐戦に従う。

この間、七月十日より七月三十日に至るまで「十八夏太行作戦」(「シ」号作戦)に参加。

国府軍第二十七軍(軍長、劉進)を撃滅し、劉軍長を黄河南岸に追う。同作戦後、第六十二師団は第一軍司令官岩松義夫中将より次の賞詞を贈られた。

賞詞

第六十二師団ハ一軍作命甲第六八〇号及ビ同第六八一号ニ基キ、困難多忙ナル任務ヲ遂行中ニ拘ラズ、特ニ頻繁活潑ニ討伐作戦ヲ敢行、毎ニ良好ナル成果ヲ著ゲツアリ。之畢竟、師団長以下ノ旺盛ナル責任観ノ発露ト、平素ニ於ケル訓練ノ賜ナリ。

予ハ茲ニ其ノ勞ヲ多トシ、満足ノ意ヲ表ス。

(第一軍司令官)

(第三中隊長に深田伊知次中尉補職)

昭和十九年三月三日

大本営作戦命令に基き、大隊は澤州に集結。寒風を衝いて澤州城を後にし、行軍をもって太行山脈を越え、大黃河北岸新郷に向う。

昭和十九年三月三十一日

大陸命第九八一号により京漢作戦の戦闘序列改編発令。第六十二師団は第一軍より第十二軍(軍司令官内山英太郎中将)に編入、京漢作戦(「コ」号作戦)参加を下令

される。第二十一大隊は、氷雪の広野を黄河へ急いだ。

支那派遣軍は武漢、広東の攻略後(昭和十三年)一意、占領地区の治安肅正に努めて来たが、遂に大進作戦を

実現することなく対米英戦争に入った。しかし太平洋の戦勢非となった昭和十九年春、にわか立って中国大陸を南北に縦貫、仏印に連続する一大野戦を敢行した。これは中国大陸に進出中の米国空軍基地を屠り、本土への空襲を防止し、併せて東シナ海の海上交通を確保するの

を目的とした。(戦史叢書「河南の会戦」)この作戦を華北では京漢作戦と呼称する。華中、華南では湘桂、南部粵漢打通作戦(ト号)と呼んだ。第十二軍においては、南部京漢沿線の要域を確保することとなり、一軍より第六十二師団、第三十七師団が急刻十二軍に抽出編入されたのである。

黄河南岸、中牟、霸王城陣地に拠る国府軍は第一戦区重慶軍である。(司令官、蔣鼎順)霸王城陣地の主攻兵団は第六十二師団、第百十師団、独逸第七旅団、戦車第三師団であり、四月初旬黄河北岸に集結、逐次渡河を終了して敵前に展開した。大隊の敵前渡河は四月十六日である。

霸王城高地は断崖、地隙によって構成された自然の要害であり、加うるに日本陸軍の築城教範によって築かれた堅障である。第一線は地形を利用して、鉄条網を伴なう

鹿砦。第二線は鉄条網を伴なう拒馬。(移動用障害物)第三線は有刺鉄線をめぐらせて、地雷を埋設し、深さ六米に及ぶ遮断壕を屈折して進入を阻んだ。

昭和十九年四月十九日

晴天。弱風。大隊は強行偵察の師団命令を受け、右翼隊左第一線となつて同日夜半霸王城高地を攻撃。二十日午前五時三分、当面する「フカ」陣地を突破。続いて「サシマ」「クジラ」「イカ」陣地(日本軍の附した敵陣地の仮称)の間隙を巧みに縫って前進。

第三中隊は大隊の先頭に立ち、第五中隊、重機中隊が之に随った。十九日深夜、第三中隊が「フカ」陣地に近接するや、鈴木義正兵長は走りよって岩壁に梯子を架け、一躍して敵中に突入し、中隊の攀登路を開いた。

第三中隊は更に枯川西南方、姚灣の陣地を攻撃。前進して索須河の陣地を攻略した。

昭和十九年五月二日

霸王城陣地を席捲した大隊は、一面またまたの河南平野を禹県に向つて進撃。炎熱焼くがごとき熱射の下に泥濘飢餓に悩まされつつ強行軍を続けた。大隊は禹県城攻撃の先遣部隊となり、五月四日黄崗店附近において国府軍第二十九軍(司令官、呂公定中将)と遭遇。之を撃破して禹県南方地区に前進。この戦闘において、第三中隊長深

田伊知次中尉戦死。新田少尉、中隊長臨時代理を命ぜられる。この日、初めて米軍機と対空戦闘を交しえる。(P-40型)

昭和十九年五月二十三日

大隊はこの日正午、長水鎮附近に進出。第十二軍主力の洛陽總攻撃に参加した。洛陽は後漢時代以来の古都である。軍は史蹟保存に万全の留意を払いつつ、二十四日攻撃を開始。五月二十五日、之を攻略。更に敗走する重慶第一戦区軍を追撃して盧氏を攻撃。国府軍、米軍の作戦飛行場を覆滅すると共に、重慶軍の連絡路を遮断した。

六月十五日、米軍サイパン島上陸。

昭和十九年六月二十九日

三ヶ月に及ぶ京漢作戦を終了。大隊の死傷は三百名を算えた。

昭和十九年七月初旬

第十二軍司令官内山中将は、鄭州の軍戦闘指揮所において、第六十二師団を至急開封に集結させよとの方面軍命令に接した。

七月八日、大隊は盧氏附近を出発。戦闘行動により進撃した往路を再び強行軍をもって開封に還り、二十二日同市西北、小宋鎮に集結をおわる。第六十二師団の警備任務は戦車第三師団に委譲。

務は戦車第三師団に委譲。

(長澤文雄中尉、第三中隊長に補職)

昭和十九年七月二十四日

大隊は貨車輸送をもって河南省開封を出発。徐州、蚌埠、南京を経て北兵衛に到着。行先秘匿のまま乗船準備に入る。

昭和十九年七月二十七日

第六十二師団は石師參編第二四号連により人員、馬匹、兵器裝備を減少、人員八三〇〇、馬匹一二〇〇、自動車五二に改編を發令。大隊員は負傷者、転属者を除き西林中佐以下一千百名。

大隊の裝備は聯隊砲二、大隊砲二、重機八、擲彈筒二〇、輕機一五である。この月、七月二十五日を以て師団は第十二軍の隷下を脱し、台湾第十方面軍司令官の隷下に入り第三十二軍(沖繩防衛軍。軍司令官牛島滿中将)の戰闘序列に編入。大本營直屬となった。

昭和十九年八月十六日

大隊は輸送船和浦丸以下三隻に分乗。呉淞を出港して東シナ海を南下。一路、沖繩本島へ向う。

米軍の反攻は昭和十八年秋以降、いよいよ本格的となった。ギルバート、ニューブリテン、マキン、タラワ島守備隊の玉砕、北東方面におけるアッツ島玉砕、キスカ島

の撤退によって、戦局は漸く重大な段階を迎えた。

大本營陸軍部はこの年一月、南西諸島防衛について部員(神直道少佐)に研究を命じ、海軍部との交渉協議を重ね、十九年三月二十二日第三十二軍を創設した。(戦史叢書「沖繩方面陸軍作戦」)

サイパン島は七月初旬遂に失陥に至った。大本營は捷号作戦を準備し、六月下旬以来第三十二軍の強化に努め、師団四、混成旅団五を基幹とする強力な軍を編成して、南西諸島に配備した。(沖繩本島、宮古島、石垣島、徳之島、大東島)

昭和十九年八月十九日

大隊は沖繩本島、泊港に上陸。その夜は那覇市内国民学校に分宿し、翌八月二十日炎熱下に那覇を出発。一日行程をもって、沖繩本島西海岸を北上し、小湾、湊川、北谷、普天間を経て泡瀬に到着。中頭郡泡瀬国民学校に大隊本部を置き、各中隊は民家に混住する。

輕機関銃及び小銃は凡て九九式の新銃と交換され、新たに二七耗機関砲を一を支給された。大隊としては華北戦線以来初めての兵器更新である。

沖繩本島防衛軍は北滿より南下した第九師団(武)第二十四師団(山)と、九州で編成された独立混成第四十四旅団(球)それに第六十二師団の三個師一旅で編成され、米

軍上陸時の決戦方式は、次の要領で策定されていた。

(一) 敵の上陸予想地点は小塚、牧湊、嘉手納のいずれかであるから、その方面に第九、第六十二、第二十四の各師団を配置し、担当師団をして上陸軍を橋頭堡に阻止せしめ、その間他の二個師団を直ちに上陸地点に集中させる。

(二) 上陸第二日の前半夜に砲兵の全力を集結して橋頭堡殲滅射撃を実施し、後半夜に歩兵の総攻撃により敵を海岸に覆滅する。

(三) 右攻撃の前夜、慶良間列島に秘匿しある海上挺進隊を以て、敵の輸送船団に特別攻撃を敢行する。

(四) 第四十四旅団は戦略予備として首里附近に控置する。

第六十二師団(石)は、第六十三旅団、第六十四旅団の二個旅団で編成され、独歩第二十一大隊は独歩第十五、二十二、二十三大隊と共に四個大隊をもって第六十四旅団を構成した。(旅団長 有川圭一少将)

大隊の通称号は「右第四二八二部隊」

(この頃、第三中隊の駐屯地は、中城湾にのぞむ中頭郡美里村、熱田部落)

昭和十九年十月十日

南西諸島はこの日午前六時五十五分より午後四時二十分

の間、高速機動部隊、米第五艦隊第五十八機動部隊の艦載機一千機による波状攻撃を受けた。

沖繩本島は艦載機の銃爆撃によって兵員、器材、施設、港内船舶に多大な打撃を受け、那覇、首里市街は忽ちにして炎上、その九十パーセントを焼失した。

大隊は駐屯地において沖繩上陸後初の対空戦闘を展開、小銃、機関銃により敵艦載機二機を撃墜炎上させた。この空襲における第六十二師団の撃墜機数は三機。うち二機を第二十一大隊で撃墜した。

昭和十九年十月十六日

天皇陛下は坪島文雄侍從武官を第三十二軍に差遣され、親しく状況を視察せしめられ、聖旨、命令を賜わった。また、第三十二軍將兵一同に御品を、傷病兵一同に御菓子を下賜された。

昭和十九年十二月七日

本島南端守備の第九師団(武部隊)が台湾に抽出転用された為、大隊は守備正面を変更され、泡瀬附近より本島南部島尻郡知念岬に移駐。知念国民学校に大隊本部を置いた。米軍の進攻を眼前に控え各中隊は陣地構築に専念した。

昭和二十年二月五日

(第三中隊は久手堅西方部落に移駐築城作業に突進した) 南太平洋のウルシー環礁を発した米機動部隊の艦載機隊

は硫黄島に向った。

状況の逼迫によって大隊の警備地区は三度変更され、久手堅より浦添村伊祖高地附近に移駐した。大隊は沖繩本島上陸以来、亜熱帯の酷暑をおかし敵機動部隊の空襲、悪疫、疲労、飢餓に耐えて、ひたすら陣地構築に専念した。陣地変換は三回に及んだ。作業は、全員行相の変わる程の凄しい重労働であった。熱汗は流れて背を濡らし、一本の十字鉞は固い岩盤の上に火花を発し、金属部分は忽ち二十種に減耗した。

二月十六日、米軍硫黄島に上陸。栗林兵団は洞窟陣地に拠って不屈の戦闘を演じた。大隊の陣地作業は一段と熱気を加える。この時、大隊本部は浦添村伊祖公会堂。大隊員は、前年十月入隊した沖繩県防衛召集兵を合して、西林中佐以下一千百七十名。

(第三中隊駐屯地は安波茶部落)

第九師団台湾抽出後に策定された、第三十二軍の作戦は次の通りである。

「概ね宜野湾(嘉手納の南)東西の線以南の島尻郡に主力を配置し、その沿岸に上陸する米軍に対しては橋頭堡に於て撃滅を図り、北方嘉手納湾に上陸南下する米軍に対しては、首里北方陣地に於て持久出血作戦を行なう」これにより二十四師団は島尻南部へ、四十四旅団は知念

半島へ、六十二師団は嘉手納の南牧湊附近に定着した。昭和二十年三月一日

第六十二師団長本郷中将は満州国の関東軍防衛司令官に転出。新師団長には、華北の独立混成第九旅団長藤岡武雄中将が親補された。

昭和二十年三月二十三日

米機動部隊、沖繩本島を空襲。

大隊は拠点陣地に拠り対空戦闘を行なう。

昭和二十年三月二十五日

午前八時、甲号戦備下令。大隊は戦闘配備につく。

昭和二十年三月二十六日

米軍第七十七師団慶長間列島座間見島に上陸。(那覇西方約三〇軒)上陸軍は一日にして全島を制圧した。

昭和二十年四月一日

午前四時二十六分。海軍の大和田通信隊司令は第三十二軍に次の電報を發した。

「沖繩方面策動部隊内通信系ニ於テ、今朝〇三四七(午前三時四十七分)ヨリ戦術浮出符号ヲ使用シ始メタリ。右ハ硫黄島上陸直前(約三時間)ニ酷似シアリテ今朝本格的ニ上陸ヲ決行スル算、極メテ大ナリ」

午前七時。天候晴れ。一千三百隻の米軍艦艇は沖繩本島西方海面を覆った。機

動部隊の砲撃、艦載機群の爆撃によって北、中飛行場は凄しい火光塵煙に彩られ、爆煙は天に沖して太陽を遮った。母艦を離れた上陸用舟艇は、一斉に白波を蹴立てて嘉手納海岸に接岸、直ちに上陸を開始する。

この朝、紺青の東シナ海に視認し得るもの、大型艦船のみで三百隻以上。舟艇群數十波。同時刻。独歩第二十一大隊本部(伊祖)に入った牧湊監視哨よりの電話。

「敵。牧湊の沖は艦船で一杯。海の水が見えません」

大隊員は壕外の台地よりこの状況を視認し、決戦が眼前に迫ったのを知った。

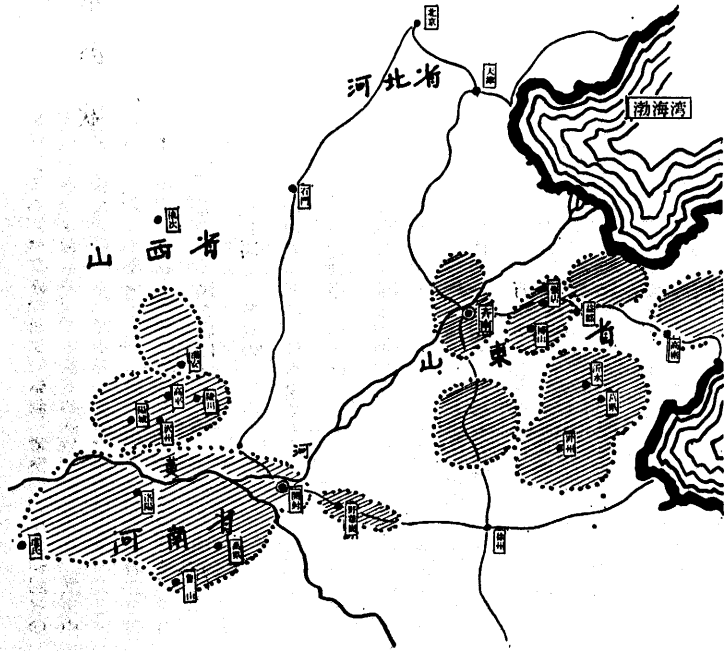
米軍上陸兵力はバツクナー中将の率いる第十軍である。その編成は、第一海兵師団、第六海兵師団、第七師団、第九十六師団の四個師団である。このほか、陽動上陸隊の第二海兵師団、乗船待期隊の第二十七師団、西方上陸隊の第七十七師団、予備隊第八十一師団の四個師団を後方に控置した。総兵力は八個師団(十八万人)である。我は第六十二師団(石)、第二十四師団(山)、独立混成第四十四旅団(球)の二個師一旅。(十万人)

敵は上陸第一日にして北、中飛行場を占領し、沖繩本島を分断して四月三日より努灣のごとく南下を開始した。

昭和二十年四月六日

この日未明より、在九州第六航空軍、在台湾第八飛行師

華北戦線



団による第一次航空総攻撃を実施。(菊水一号) 出動機
数三四六機。米軍大型艦艇、輸送船六十九隻を轟沈破。
米軍に周章狼狽の兆しが現われる。

(航空総攻撃、菊水作戦は第十次まで実施)

昭和二十年四月十二日

第二次航空総攻撃を実施。(菊水二号)

この日、北、中飛行場より米機七十機離陸。この日の米
軍来襲機は、艦載機、離陸機を合して四百機に及んだ。

昭和二十年四月十八日

独立歩兵第二一大隊、第三中隊の一部を以て夕刻牧湊橋梁
を爆破した。同日夜半、米第九十六師団は舟橋を以て牧
湊橋梁を渡河し、浦添村に浸透して南下を続けた。十九
日未明、渡久地上陸した第二十七師団は、第五百五連隊
をもって伊祖高地を夜襲し、之を占領した。

昭和二十年四月十九日

伊祖高地を占領した米第二十七師団、第五百五連隊第三大
隊に対し西林大隊は第三、第四、第五中隊をもって逆襲
を実施。天明まで近接戦闘を展開した。この夜襲戦にお
いて第三中隊は中隊長長澤文雄中尉以下約一五〇名、第五中
隊は中隊長平井泰次郎中尉以下全員死傷し、大隊の戦力
は半数以下に激減した。米軍は艦船一千四百、兵力十八

万、空軍一万機を以て沖縄本島南部を覆い、第三十二軍
は四月二十四日、第一線を前田、仲間の線に撤退。在九
州、在台湾のわが航空部隊は四月二十二日までに四次に
わたる航空総攻撃を米軍に集中した。(菊水作戦)

昭和二十年四月二十五日

大隊は城間、屋富祖、安波茶地区においてなお、激戦を
継続したが、戦力は四分の一に減耗し、経塚西方第五十
九高地に転進した。(残存大隊員約百名、第三中隊員は
約三十名を算す)

昭和二十年四月二十九日

午前七時三〇分、五十九高地は米海兵第六師団の攻撃を
受けた。敵戦車及び歩兵群は陣前に迫って斉射を行ない
敵機は上空を乱舞して射撃を加えた。大隊員は露出陣
地に出て、これを射撃し、戦車に対しては肉迫攻撃を行
なって四台を炎上せしめたが、敵の相つぐ爆撃、砲撃、
火焰攻撃のため、死傷続出し、午後四時までに大部分
は戦死。夜間生存者の殆んどは前面の敵に斬込みを敢行
し、ここに独立歩兵第二一大隊は全滅した。

昭和二十年六月二十三日

この戦場において西林鴻介中佐負傷、のち、戦死。
この日をもって、独立歩兵第二一大隊は解散した。

北支派遣軍の歌

一、御稜威のもとに丈夫が

一死を誓う 聖戦の

堂々進む 旗風に

威は中原を 圧しつづ

敵たり 北支派遣軍

三、非道に 民を虐げて

抗日叫ぶ 賊党の

破壊のあとに 打ち建てる

新たな秩序 かぐはしき

道あり 北支派遣軍

二 長城万里 固むとも

黄河の流れ 乱すとも

猛追やまぬ 陸と空

東西四方に 頑敵を

撃破す 北支派遣軍

四、妖雲暗く 閉ざしたる

万里の空も 今晴れて

天日の下 民草が

歡呼し仰ぐ その威容

熾たり 北支派遣軍

北支の第三中隊

松見 巳之吉

独立混成第六旅団は昭和十四年二月に編成された。

当時私は仙台陸軍予備士官学校第一期生として卒業訓練の為、栃木県那須野ヶ原演習場において、教育総監西尾銈造大將の巡視を受け引続き仙台の学校まで約二百杆を行軍演習しながら帰校する猛訓練中であつた。

三月九日同校卒業、京都の歩兵第九連隊補充隊に復帰、見習士官を命ぜられた。

四月十六日独立第六旅団独立歩兵第二十一大隊に転属を命ぜられ、将校以下一五八名と共に屯営を出発、四月二十四日青島上陸、徐州（見習士官は同地に於て一ヶ月の集合教育を受く）を経て開封の独立歩兵第二十一大隊に転属したのである。

当時の独立第六旅団の司令部、各大隊本部の所在地は次の通りであつた。

旅団司令部 山東省呂県
砲兵隊 山東省日照

工兵隊

通信隊

独立第二十一大隊

独立第二十二大隊

独立第二十三大隊

独立第二十四大隊

独立第二十五大隊

突に高度分數配備であり、特に当第二十一大隊は遠く旅団の隷下を離れて、河南省新郷の第三十五師団（原田熊吉中將）の指揮下に入り私は在支三年半の間第十二軍司令部の濟南には四回も出向いたが旅団司令部の呂県には一度も行く機会がなかつた位である。

次に我が独立第二十一大隊は左の如く配備し、隴海線及び新開線並びに沿線の警備に任じたのである。

大隊本部 開封 第三中隊 野鷄崗

第一中隊 開封 第四中隊 棉徳

第二中隊 開封

第三中隊は中隊本部野鷄崗、民権に將校分遣隊、柳河に將校分遣隊、小瀬に下士官分遣隊を配備し、隴海線並びに沿線の警備に當つた。当中隊の警備地域は他中隊に比し、外出する所も何もない文字通りの寒村僻地であり、元來中隊の兵隊は素朴で真面目で、警備、軍紀維持上何等困難の

ない全く理想的な中隊であった。

旅団司令部は山東省の奥地で何時も八路軍に悩まされ昭和十四年末の討伐中約一ヶ月中隊が全滅に陥り野砲一門敵に奪われ、旅団長土屋少将以下決死の奪回作戦を反復すると書いた悲惨な状態が続いた。遠く旅団の膝下を離れ、比較的平穏な我が大隊に取っては誠に申訳けない気持で何時も一杯であった。

それでも昭和十四年、十五年と敵の徐向前麾下の兵団の新開線、龍海線沿線に対する攻勢は活発で特に我々初年兵教育期間中に於ける敵の開封攻勢の戦闘は熾烈であった。

開封北方の城壁の一角が突破され急提連絡指揮に飛んで行った地区警備隊副官が戦死、第二中隊新井少尉戦死、第二中隊野洲少尉両眼負傷(内地運送)と将校の犠牲者が多く、下士官兵の戦死傷者は比較的僅少であった。当時開封には戦闘部隊が少なく敵の一部城内突入により遂に教育期間中の初年兵をも戦闘に参加させざるを得ず一時は悲壮な気持だったが、初年兵には犠牲者もなく、かろうじて敵を撃退し得た事は何よりも喜ばしい限りであった。広大な地域と線の占領、特に鉄道警備にあつては高度分散配備は已むを得ない事ではあるが、小兵力の分遣隊などは敵部隊の鉄道横断時に襲撃を受けて全滅させられる事が多く、又駅に直接攻撃を受けて死傷者が出るなど兵隊は何時も死

一風夜一睡もせずに警備に当り、無事その任を終える事が出来たのである。

私は殿下のご視察時のお写真と恩賜の煙草を頂く光栄に浴し、中隊長第一歩の幸先に感激して野鷲崗に赴いた。

野鷲崗の中隊本部はバラック建のお粗末な兵舎で隊長の寢室もなく兵舎より若干離れた駅の小さい一室を初代小竹隊長より使用していた。これはまずいと思つたがそれが暫らくして思いもかけぬガス中毒に依り危く生命を失う事となつた。

張店移駐前の示威搜索に寒いミソレまじりの雨の中を沿線各部落に出動し、終日禰までズブ濡れになって行動し夜半帰還した時の事である。

その部屋は駅の西側に三畳そこその部屋で内部は白壁で窓もなく出入口は勿論西側に一ヶ所のみ、誠にさくばくたる部屋である。当番が睡眠時間をさいて被服の乾燥と暖炉の目的を以ってブリキの一斗缶で石炭を燃焼させてから部屋に持ってきてくれたのである。バラック兵舎の場合何の事もなかったが何分狭い部屋だから大変、一酸化炭素ガスにやられてしまった。奇蹟的にあつて眠をさました時は身体の自由も思考力も声もきかないが、やっと思いで寢台の端にじりより土間に落ちる事が出来たのである。ビロウな話だが肛門の括約筋がきかないので土間に落ちると

と恐怖を感じながら警備していたのである。

私が第三中隊に赴任する前ではあるが中隊より小沼竹五郎一等兵の離隊逃亡が不幸にもおきたのである。中隊挙げての必死の搜索にも拘らず消息は香として不明であった。

結局離隊逃亡の原因動機等は判明せずに終つたのであるが北支軍將兵の中には聖戦も膠着状態となり超劣勢兵力を以って広大な地域で、寂寞とした狭い分哨、分屯地の中で絶えず死に直面していると、強固な意志、必勝の信念のない者は虚脱虚無、複雑な心理状態になるものも居たのであるうか。

これに対して敵の謀報機関による謀略工作も盛んにあり他部隊の將校であるが上は敵の山東従隊の長になつた者、特殊技術を有する兵、軍医等で大変憂慮されている者、中には自分の元部隊の戦闘司令部に敵の先頭になつて襲撃して来る者もあつたのである。

小沼一等兵離隊逃亡以後我が中隊は勿論大隊に於てもこのような不心得者が出なかつた事は勿論である。

私が第三中隊長を命ぜられ野鷲崗に赴任する前に、陸軍大佐関院若宮春仁殿下の開封付近のご視察の警備を約一ヶ分隊を以つて命ぜられたことがある。

大した情報もはいつていないが、皇族殿下の警備だ。お付武官、憲兵等と十分連絡をとり随分と緊張し神経を使い

同時に糞が全部出てしまつた。若し入口まで距離があればおそらく出入口に向う途中で斃れているのだが、幸いにも部屋が小さく、落ちた位置がすぐ出入口の戸であつた為、かろうじて戸外に出られ九死に一生を得たのである。

鉄路警備は鉄道警備の最も地道な手段で二、三人一組になり兵隊の要領で分遣隊から分遣隊までの長い区間の鉄路を巡察し、大釘の脱走から地雷爆薬の敷(埋)設まで発見しなくてはならぬし、敵には狙撃されるし、友軍と雖も不用意に分哨などに近づくとは経験浅い歩哨などに誰何と同時に射られたり随分と苦勞の多いものだ。

軍犬は各中隊に一頭宛配属されているが軍大兵の勤務の都合もあり連日使用する事も出来ないし、その成果の点についても全り多くは期待出来なかつた。

最も頼りにし成果のあるのが大隊に配属されている装甲列車である。將校以下四十名で十一輛編成野砲一、重機関銃二を装備、野砲隊、工兵隊各一ヶ分隊も配属になつていたので相当の戦力であり、情況が悪い時など文字通りひっぱりだこだった。

鉄路の直接巡察警備よりも更に重要で苦勞の多いのが沿線四、五軒以内の愛護地区の治安維持である。常に的確なる情報蒐集に全力を挙げ大隊本部との連絡、密偵による謀報と適切なる討伐搜索示威等の出動により之を確認し宜撫

工作の実施と相俟って村長等の定期的な情報報告を受け絶えざる努力により概ね平穏な治安が維持出来たのである。しかしこれとても一枚皮をはげば保身の為の仮装に過ぎないかも知れないし、密偵も又常に敵側に通じているとみななければならぬ。良くなつた子供が時々真顔で尋ねるのだ。戦争勃発時日本軍は家を焼き家財を掠め母や姉妹を犯し老人や子供まで殺したのに、なぜこの頃は同文同種の兄弟の国であると言つてこんなに親切にしてくれるのかと。今は成人した彼等が当時の我々の事をどの様に思つてゐるであらうか。

昭和十六年十二月十日山東省張店に移駐。茲に旅団創立以来二年十ヶ月振りに独混第六旅団の隷下に復帰し一ヶ大隊ゆくり入れる整然たる張店の兵舎に作戦部隊としての陣容が整つたのである。

移駐後旬日を出でずして第二次清水泊北地区剿共作戦、魯中作戦、魯中掃蕩作戦、博興高苑地区討伐、益北地区作戦、第二次冀南作戦と開封時代と違つて文字通り作戦討伐に軍日なき有様であつた。

連日の作戦行動にかかわらず非才不徳戦果に見るべきものなく、いたずらにシラミの収獲のみ多かつたのは慚愧に耐えないが、軍紀厳正にして戦場にありがちな犯罪は何一つなく中隊全員が終始皇軍として恥じない行動であつた事

は欣喜の至りである。

昭和十七年八月一日付で私は久留米第一陸軍予備士官学校付を命ぜられ中隊の戦友を山東省青龍寺付近に強して内地に掃蕩したのであるが、その後の大隊の戦闘は熾烈を極め後任の川本中隊長、引地大隊長、本部の池田中尉、高田副官と多数の戦死傷者を出したとの報に接し中隊、大隊の戦友の苦勞を思い命令とは言え独り内地にある事を申訳けなく思つた。

昭和十九年九月中旬思いがけず沖繩より東田曹長の便りを受け大隊が日本国防の第一線たる沖繩に転進した事を知つたのである。

大東亞戦争終焉の地となり世界戦史に類のない激戦が死闘八十日の長きに亘つて行なわれたこと、そして全員玉碎の報を、皇都に於いて本土決戦に備へ陣地構築中に知つたのである。我が戦友達は如何なる星のもとに生れたのであらうか。北支に於ける馬鞍山前後の激戦を聞いた時でもなんとも言えぬ暗備たる気持に襲われたが、今度は世界戦史に類のない沖繩戦に参加全員玉碎である。しばし茫然自失為す所を知らなかつた。冥目して亡き戦友の冥福を祈ると共に愈々次は本土決戦と覚悟も新たに陛下のご馬前で天附れしこのみたてとして討死し、亡き戦友の後を追う決意であつた

第三中隊

三千の敵と交戦

上 木 喜 隆

臨海線の鉄道警備に任じていた小竹隊は、その主力である中隊本部を「野雞崗」においていた。大体、中隊の守備範囲(警備受持範囲)は、鉄道線路だけをみると西は「蘭封」より東は「小廟(商邱)」に至る間でその沿線を含むと誠に広大である。凡そ、鉄道警備に伴う沿線部落の治安維持は不可分の要素であつて、むしろ後者が全うされて始めて前者の任務が果たされる事は言うまでもない。

さて、この小隊を披露するに当たり、われわれの中隊の構成である兵連を概括的にみることにしよう。

我々は平素の訓練において必勝の信念を叩き込まれてゐる平凡な兵隊である。敵を追いまくり、追い散らしたり、時には分捕り品などこたま手にした経験しか知らない。所謂、恐いもの知らずである。

戦友という義理人情の発露は平時において、差程挙げる程の事も無いが、お互い星の数で厳然と區別しているだけの話である。ところが一旦、作業が渉外的になり、支那

人に接したりすると、俄然、日本人意識、とりわけ優越感(征服者的)をもつて、星の数など問題でなく、強引によつかつてゆく傾向がある。(小竹隊に限らないだろうが)このことは、激しい戦闘ともなると、兵隊の個々の心情は最も強烈に浮彫りされる様である。一方、全体からみて数少ない例ではあるが偽善者(猫かぶり)を発見することも屢々である。

激しい戦闘に際しては、今更怖々尻込みする様な気配はみせない。みんな同じ様な根性を持つていたに違いない。そこには猛進あるのみである。戦闘というものは、兵隊にとっては至極簡単である。前進すればよい。指揮官を見失わないよう進撃することである。小隊長は中隊長を、分隊長は小隊長を、兵隊は分隊長を見失わない様進めばよいのである。要は兵隊同士進撃を保つていけばよさうである。殊に部落に入つて掃蕩戦になると、余計にそれが感じられる。ひとりぼっちになつたりして、ウロ／＼しやうものならぬ怒り狙い撃ちされたり集中攻撃を受けたり、時には、いわゆる良民約交してその餌じき(拉致等)となる。以上の様な行動をし、また隠匿している兵隊達であつたと観ている。

我等の小竹隊は、沿線の村落に在る部落民を平素から手なづけることに力を注いでいた。この事によつて彼等は少

しても異状が起きたり情報が入った場合、大抵の場合村長が中隊本部へ轉らしげに告げに来て呉れる。勿論、電話が無いから徒歩でやってくる。彼等の情報は、望樓の監視員同志の手旗なり、ハンドサインを利用したりするらしい。でも普通は伝方式を採っているようであった。従って最初の口伝が数ヶ所を経て通伝者が何人か代るため、とんでもない情報になることさえ屢々あることが予想される。こんな場合むげに咎める訳にはゆかない。

夏が終わり、一足飛びに冬になった頃(昭和15年10月初頃)のことである。野雞崗北方の一隊長が伴れの者と一緒に駅舎の歩哨線を突破して情報をもってきた。

「敵(八路軍)が野雞崗北方の部落に迫ってきている……」

我々の部落に到達した場合は、掠奪は必然である……」

(掠奪)平素、日本軍に協力している村落民に対して八路軍は相当ひどいことをするらしい)

私はその頃、中隊事務室にいた。遇番下士官(田中修三軍曹)が別棟の中隊長(小竹憲)を呼びに行った。私は通訳(朝鮮出身軍曹)を探しに出た。通訳はすぐ駅舎で見つけることが出来た。

中隊長は通訳を交えて事情聴取、数分にして、西山一男准尉と相談一決、非常呼集、出動である。

敵が何名おるか、火器の勢力は如何程かなどまだ定かではないが、隊長の意図として殲滅など思いもよらない事だっただけだ。しかし少く共、彼等を追い散らすことに間違いない。各分隊共功心の發揮など意識してはいないまでもじりじり前進している。この様な戦況で小竹中隊長はいやに落着いてる。つまり、敵兵をみつけたからといって猪突猛進する様な気配がない。専ら眼鏡で偵察に熱中している。主力に近づき、それから進走せしめるのが主目的だ。たと思ふ。強引な進撃ではなかった。もしそうだったらわが方の兵力損耗(戦死)は見え過ぎていたからだ。その点では小竹中隊長と西山准尉の息がピッタリ投合していた

中隊は、田中軍曹と衛兵僅かを残して、全員會前集合、小隊長に、西山准尉、吉本軍曹、分隊長には戸谷軍曹、伊藤静夫軍曹、馬尾伍長等々兵力給員六十名。

1時間ぐらい徒歩行進したろうか、休憩無しで行進だけに距離にして約6軒である。大体鉄道線路から二里離れると情況が悪い。それは雰囲気というか、なんとはなしにムードで判る。つまり、女、子供を申合わした様に急激に見かけなくなる。そして日本軍に対する態度素振りが観面に変わってくるのである。我々の先輩(昭和12、13年の緒戦)従軍者の狼籍振りを想い出させるものがある。部落では姑娘をみかけることが出来ない。老婆や子供(4、5才の小核子)は偶には見かけるが、不思議に言葉(兵隊の使う支那語)が通じない。

斥候尖兵が真剣な顔付きで指揮班に在中隊長のもとに情報を賣らす。敵の侵入している部落に到達した様子である。愈々本物だ。ということは、始めに情報をいれた村長の言が真実であったのだ。この村長、我々の道案内をしていたが、この時分には既に姿が無かった。どのあたりでか小竹中隊長が放免したのだろう。いやそうではなかった。その村長は隣村の村長に申送って道案内を交替していたのであった。

案の定、望樓には有力な奴が屯しているらしい。民家か

と想う。今日、この掃討については、とにかく接近、そして追払う、この事が先決だったらしい。

一軒宛民家を孤演しに敵兵を探すのであるが、愚問々々しては行かない。正直いって、いい加減な捜索に終って了う。従って、都合よく日本の兵隊の気付かない様な処に潜んでいる奴は、多分に見逃がしたのである。仮に、見つけたところで兵隊と土民の区別がつかない(便衣)かどうかどうだと詰問を繰り返すより頭の一つもどやしておくのが勢一杯である。この時はやはり、日本軍が部落を通過したというだけの結果であろう。(勿論掠奪など無い)

こうして前進していくうちに、敵の本隊という可成りの数が集結している部落に突入した。この部落の中心地帯にある望樓には、敵の指揮官がいるに違いない。土塀に囲まれた民家(中級)を砦に形勢を窺望する。中隊長を中心とする指揮班関係は、我々より少し後方にある。自分分隊長は伊藤静夫軍曹であるが、戸谷軍曹の率いる分隊も一緒に固まっていた。ここで立射ちの構えをする。恰度土塀の上限に銃を据えることが出来、もってこいの地形である。

望樓(敵の主力がいるらしい)のところ迄距離はせいぜい三百Mしかないとどこまでに進んで来たのだ。しかし、これ以上進むことは六つかしい。見透しの効く距離ではあ

る。それは恰も広場の連続とでもいおうか、植込みでもあれば立派な市民公園とでも言える広瀬とした地形である。大阪ではいえば御堂筋だろう。二十四間道路と称するに値する。もともと、たかの知れた一寒村だが、いかにも大陸的だ。

おっと勇敢にも我々に向ってくる奴がいる。散兵線を敷き乍ら歩兵操典や作戦要務令の初歩の通り忠実に誠に勇敢なる前進をやらかしている。一方、我々は、全く好都合な場所に攻撃体勢をとっているのである。土塀の高さが可成りそれなりにあるのだが、内側に佇つと盛り土の關係でぐつと低くなっている。

即ち、立射に好都合の高さである。首だけ晒している格好の掩体でもある。銃を据えて自分は始めて、射撃に入つた。これまで節弾していたのである。ほかの兵隊がどんどん撃つてくれたのをよい事にして、また今までは、いくら撃つたところで威嚇射撃の域を出ないといっていたのである。ボンボン射撃を開始したものの仲間命中してはいない様である。そんな効果判断どころではない。撃ち合ひは激しさを増してくる。敵の射撃も熾である。ボンヤリしていると、それこそこっちが危ない。自分達から直線、ただか二百米程しかない距離、そこには敵の最先頭の連中が散兵線をしいている。勇敢に我々に迫って来ているのである。

に膝射ちの構えで何の俺体も無しに堂々たる奴がいるのは呆れるというより、感心ものである。もはや凄しい勢いだ。雪崩の勢いと表現すべきか。

こう切羽詰まっては白兵戦は必至だ。敵兵がどいつもこいつも大きい図体の奴に見える。それは自分の弱気からくるのか、それとも我が方の劣勢を感じとっているためであるのか。今すぐにも展開される白兵戦を想定した為ではある。身体がブルッ、ブルッと震える。これでは正確な射撃どころではなくなる。身体が震えたのが確然と判る。何故だろう。これが所謂「武者震い」というものであろう。初めて武者震いとはこんなものかと頭に閃いたのである。命がけの所作に対して、真剣に一步一動を開始したのだと思ふ。頭の中に、胸の中に、「一瞬死（戦死）」を覚悟した。突に頭の中は何ともいえない切なさで錯乱したものがグルグル廻っている様だ。また一方、死を賭すという事ほど元氣というか勢いのもりもりと湧くものはない、と今更乍ら感じ入ったのもこの時である。

山本軍曹（予備役）が「それッ、あいつを撃て……それッあそこに入らばりついている奴を撃て……」と怒っている。平素の優しさ一杯（ほんの少し猫背で生真面目な女性の声の持主）の同軍曹は、仁王立ち然として、弾丸雨飛の

る。それも段々に数が増えてくる。凡そ、弾の撃ち合ひが激しいにも拘らず、一体どういうことになっているのか、まるで空砲でも撃ちあいつているのか、我々も敵も、左程に弾に当たっていないということである。全くじれったいことである。それにしても、これ程近距離になると狙い撃ちは効果を現わして来た。敵さんも今以上には進めないらしい。つまり、ボツ／＼やられる奴が出て来た。こっちは（自分）射撃の名手をもって自負している（部隊の射撃大会に優勝歴）だけあって、その信念が幾分手伝ったのか、よくあたるのである。命中した場合の敵さんの様相がまさまじと視られる。それは、命中と同時に一メートル程身体が地上に舞い上がり（踊り上がり）地べたに落ちる。どういふことかよく判らないが、とに角、命中すると完全に一たん空中にトンボガエリして落下するのである。それこそ胸のすくというか、敵愾心の通り場がついたという訳で痛快極まりない。そうはいうものの38式銃で幾ら機敏に動作しても数的にみて効果は知れたものである。この我々の発射数にも増して、つまり弾丸雨飛の中を突破して前進して来る敵さんが何と多いことよ、とてまかなわんところまで数が増えてくるのである。前へ／＼出て来る奴をやっつけるにも限度がきたようである。先頭の敵さんは現に50mにまで迫ってきている。図々しいというか身体全体を露わ

中をものともせず勇猛な指示をしている。下士候出身の吉本軍曹も流石に勇敢だ。この様に下士官の勇猛振りにつられたのか、青森具出身の兵隊も懸命に頑張っていた。こんな激しい射撃戦がどれくらい続いただろうか、永い様でもあり、短かい様でもあった。

我々が進撃してきた道筋以外の左右八方から敵が、どんどん増えて来た。一八〇度廻転する機関銃が欲しい。しかし、それは思うだけで何ともならない。いざれ血だらけの肉弾戦か手榴弾戦になるに決まっている。そう感じ思いつめていた時である。

小竹中隊長と西山準尉が悠々と何か話している。息詰まる様な切羽詰まったさ中で、流石に鉄兜のあご紐を口に咥えたその形相は凄しい程に険しい顔付きであった。弾丸が容赦なくビュンビュン飛んで来るのに気を配ることは問題外なのだろう。お二人共悲壮な顔付きである。そこから窺える焦燥感、瞭かに読みとれる。突にやり場がないといった風である。

我々は、全部やられてしまいますヨ……という意味の事を準尉が進言している。

小竹中隊長は「我々（日本軍）にとっては、退却ということは有り得ないんだが……」という意味を盛に話している。自分にはよく聞きとれた。

「今、命令を出して、全員の掌握が肝心だ……」そんな会話も聞きとれた。

しかしながら、今更、聞きなおって「掌握」ということが通じるのであろうか。

みんなテンデンバラバラ、夢我夢中で……上官の指揮命令など耳に入らないし、通じもしない。ただ戦友が左右の隣にあって聞っている事だけは、自然と意識しているだけのことである。

弾丸雨の凄じい炸裂音と、どこからともなく聞こえる喚声、それ等が交錯する増城ではある。いかに鼻目目にも、現在、混乱していることに間違いない。という事は戦況われに不利、ゆとりといった気配は既になく、土壇場というか千仞の谷底を目前に控えたところである。小竹隊全員は、も早や玉碎寸前にきている。それ共空中分解勝散である。それほどに激戦である。

ただひとつ不思議なことに、我に誰一人負傷者も無ければ戦死者も出ない。この様な戦況に、皆、何を夢中になっているのか窺う術も無かった。とにかく皆よく戦っていることは確かである。それにしても、自分にとって、ハッと我にかえった一瞬があった。

弾丸は殆ど撃ち尽くして残り少ない。五、六発も残っていたかぐら。ソッと手榴弾（亀の子）に手を触れた。こ

れが最後の切り札である。最後に投げつけるのではない。自爆用として、恥を曝らさずに済ませる事が出来るのだと心に決めこんだのである。（現在の若い人達には、一寸理解し難いだろうが、これは真正銘真面目な話である）こんな事は今にして、実に懐しい限りである。と今も思っている。

想像を絶する慌しさのなかに、冷静な一瞬が去来するうちに、うつろともいえる些か動作の緩慢なひとときもあった。激しい射撃戦、弾丸を消費する程に、射撃動作が消極的になっていった。つまり、射撃の合い間合い間に、敵の前進を監視がてら、前進の様子を視ていたのである。それも敵最前線の散兵線ではない、主として後からの増援振りを監視していたのである。

何と、来るわ来るわ、どこから出て来るのか際限なく続いて進撃してくるのである。たとえ我々友軍の射撃の命中率百パーセントにしても、仮に50発で50人やっつけても何百人と統いて押寄せて来るので処置なしである。そのかみ二〇三高地のそれも規えるというものだ。人海戦術とはこのことをいっているのであろう。

突然、中隊長が怒鳴った。

「下れ、下れ」理由も何もない。

「下れ……」「下れ……」と怒る様な語気であり、また

真剣そのものの様であり、必死の顔付きでもあった。

誰も返こりとはしなかった。こんどこそ叱り飛ばす様に

「退れ——」「あぶない、退れ——」と叫ぶ。

漸く、各分隊長も納得した様に、兵隊に伝声した。慌てて何かに躓き、転んでいる兵隊がいた。この辺がそもそも敗走の混乱の始まりと私は感じたのである。

弾丸飛来の断続を利用して、ボツボツ退り始めたが、正直いって退却である。退却動作が加速度に速くなってくる。

西山准尉の小隊は、一足先に下がったらしく見えない。中隊長は仁王立ちで恰も3星コーチボックスにいる監督の様にグルグル手を廻している。兵隊を後方に下げる事に懸命であるが、と同時に

「射撃を止めたら駄目だ……」と、どなっている。いわずと知れた射撃と退却とを交互にやれということだ。

ボンボン撃っては、さがり（逃げ）停っては撃つ、そして逃げると言ひ具合だが、結構、今までも増してハードトレーニングではある。そこには、とてもやり切れない焦燥感が溢ぎってくる。

日本軍が退却し出したとなると、彼等の勢いづくのも無理はない。その激しい追撃はこれまた大したものである。じがない話したが、頭の中に、いろんな事が去来する。

先ず、「負け戦だなア……」

「こんなところで、死んだら大死だ……」

「戦死として扱ってくれるかな……」

「戦意喪失——退却——これ程怖しいものもない」

攻めるより、守ることに至難さがつくづく。判かる様な気がする。万才々の歡呼で、送って呉れたのに……故郷の人達の顔が、グル／＼去来する。

母親の顔が、はつきり浮かんでくる。（筆者には、妻子が無かった）

「とにかく生きて帰るんだ——」と胸のうちに誓うのであった。

戦友達より一步でも先に、退却しようというエゴイスト的なものが湧いてくるのはどう仕様もない。焦り気分が出て来る。この様な焦りは、猛烈にしんどい。というのは、動作が全身的に麻痺してくるのである。どういふことかという、手足の動作がいうことをきかない。即ち、脚がもつれるのである。気ばかり早くて、足がついてこない。銃を把っていても、感覚が痺れてくるのである。ともすれば平衡神経が犯されてくる様に思えた。

茶褐色のメリケン粉をばら撒いた様な地表である。脚もとの疲労に比例して、銃を持つ腕も相当な疲れをきたしている。遂に、銃口を一寸した凸地に突込んでしまった。いま射撃したら銃身が爆発してしまうという事は自爆す

ることに外ならない。えらいことをやらしたものだ。突壁に手指で銃口を拭きとる様にしたが、所詮、銃口の内側はどうにもならない。兵器は天皇陛下から戴いたものである。耳にタコが出来る程聞かされたものである。大へんな事をしたものだ。先を争って退却している間に起きた出来事であるにしても、こうしたせわしい間にも、以上の様なことが、よくも頭の中を去来したものかと、我乍ら感心したものである。

大分逃げ延びた。も早や弾丸も飛んでこない。絶対安全地帯に達した様だが先頭をゆくものは、ずっと先についている様だ。先に逃げている兵隊を追馳けるなんて、実に情ないことだ。夢我夢中で走っていた筈が、それも足がもつれ、気ばかりあせて足が地についてこない。一寸したものに蹴躓つく。乾期であるから、土(地面)といっても、砂っぽいではなく、埃っぽい(この辺は黄河の河床だった時期もあったに違いない)ので、全身メリケン粉を浴びた状態である。この間よくもいろいろと思案出来たものがある。

中隊主力が広潤とした場所に集結した格好で停止している。戦線の整理といったところである。我々の分隊も漸く中隊主力に辿りつき一緒になれたのである。始めて安心感がありもりと身体中に張り、身体中が一へんに軽くなった。隊するのではなく、もとの戦線を今しばし見届けんが為、横(西)へ進んだ。応援軍(在開封部隊)を頼んだその部隊に近づく(会见)方向であった。この友軍を見つけたらすぐ、さっきの激戦地、敵の位置へ誘導し易い為であろう。さっきの古年次兵が、早やばやと戻ってきた。「部隊本部は直に援軍を編成、先頭(尖兵)は既に出発した……」との返事を中隊長に報告している。

中隊長と西山准尉が何やら相談話をしている。この間小休止であった。今もう一度戦闘のやり直しかな……いろいろな事が頭に閃いて来る。

間もなく、我々は援軍に合流することなく中隊本部(野難崗)目指して一路、掃隊していくのであった。

昭和十七年夏私は凱旋した。家に寛ぎ、一枚の新聞(朝日大阪版)が残されていて差出された。

父親が残っていて呉れたのである。勿論戦闘記事充滿の紙面である。三段抜きの大きな活字で

「小竹隊、三千の敵兵を蹴散らす(開封路)の見出し記事であった。その内容記事を規うと、百五十の小竹隊が奮戦し、三千の敵に大損害を与えた模様……とあった。

この時は笑い乍ら真相を話したのを覚えている。父親はそうか〜と頷いていた。

感じである。

あとで聞いた話したが、既に残っていた古年次兵が馬に乗ってやって来た。それは、中隊本部(野難崗)の留守を預っていた田中修三軍曹が、開封の部隊本部へ「小竹隊の耐伐出動」を報告し、そのあと、その後の中隊主力はどうしているか、伝令と連絡をかねて状況を偵察に来たのである。当然の事だが当然の事がえてして忘れられたりする。田中軍曹の処置は誠に適切だったと思う。この伝令に、馳って来た古年次兵(顔は今でもはっきり覚えているが、名前を思い出せない)に、小竹隊長は「部隊本部へ応援軍の出動を至急頼む」旨、すぐ連絡せよと命令した。兵隊は、「ハッハッ」と返事、復唱したあと、馬に飛び乗った。物言わぬソワソワした馬に乗ったかと思いきや拍車一撥、ドッと馬が走った。物凄く勢いで走った。恰も馬も事情を噛みわけているかの様に走った。みるみるうちに地平線の彼方野難崗を目指して、まっしぐらに消えていった。このへん全く西部劇のドラマか、砂漠戦の一コマと変わらない状況である。素晴らしい幕遣である。そして頼母しい限りの兵隊である。それは単騎一鞭、完全にヒーローである。それともう一つ、歩兵という兵隊と、馬を比べての段違いの機動性をまざまざとみせつけられた。

中隊は、ポツポツ行動を開始した。それは中隊本部へ帰

三の隊の羨(しつけ)

吉田 広 繁

「昭和十五年十二月一日、中部第二部隊二入隊ラ命ズ」これが、私が受けた軍命令の第一号である。これによって、私は初年兵の第一歩を踏み出した。当時の新聞やラジオは、連日のように皇軍の破竹の進撃を報道し、全国民の耳目はいやでも遠い満州やシナ大陸に注がれていた。

そんな時代に、私は中国河南省開封の土を踏んだ。中部第二部隊(名古屋)に在隊したのは数日で、真新しい羅沙地の軍服に着替え、初めて帯剣、帯革を身に附けたと思ったら、直ちに軍用列車に乗せられ、永い汽車旅行を続けていた。大陸は果てもなく広い。広い大地の向うに真っ赤に燃え立った夕陽が沈むと、広野は忽ち深い闇に包まれる。聞えるのはひた走る列車の軌道音だけ。

北支派遣軍、山田部隊、橋場隊、小竹隊。

これが独立混成第六旅団、独歩第二十二大隊第三中隊であり、私の配属先である。三中隊は「三の隊」と呼ばれて橋場隊の中でも強兵の集りと称されていた。それだけ、他中隊より練はうんと厳しい。教練は文字通り火を噴く辛

さである。学科、術科、駆け足、行軍、射撃。どの一つも取りあげても歯を食いしばり、死んだ気でやらねば通過出来ぬ代物ばかりである。零下二十度の練兵場で熱汗淋漓、顔面を紅潮させて、それはもう頑張った、頑張った。

初年兵生活は入隊前から聞いていた。覚悟も出来ていたが、さて実地に飛びこんで見ると、事実は聞きしに勝る辛さである。教練の苦しさはまだよい。どうにも耐えがたいのが内務班の、日夕点呼前の「黙」である。私的制裁——と云えばそれだが、どっこい三の隊の黙は些かニユアンスがちがう。

教育して下さるのは二年兵三年兵殿で、如何なる因果であらう。之が揃いも揃って東北の古年次兵。それも一連番号を附けて徴発して来たかのように、全員、秋田出身の豪傑と来ている。

東北弁というのは寿司がスス、新聞がスブンで、あとは愛知県と大差ないと思つたのが大きな誤り。聞いたこともない東北弁の大渦に呑みこまれて、私達初年兵はウロウロするばかりである。こちらは「そうだけあー、来やしたなも」「あの、よう、そうすら」でなければ、日本語ではないと固く信じている。

それなのに鬼のような聲で、
「ヨスタアーここさ来り！」

十三秒をきった後足だと突撃の時に競走を挑んで見たら、そのまゝ、古兵の早いこと、早いこと。横目で人の顔をちらと見て、ニヤリと笑うとすうっと追いつて行つてしまふ。秋田の奴は足から先に生れたのか。くそ、銃術なら青年学校でちったア鳴らした腕前だ。刺突(しとつ)一本と繰り出せば、ポーンとかるく払われ、股倉に木銃突込まれて、ぐいと空中に弾ね上げられた。よし、歩きで来いと目をつりあげ、軍靴踏み鳴らして挑んでみたら、相手は一日十九里の行程を花唄まじりで涼しい顔。

一体、彼らの構造はどうなっているんだ。駆け足、ダメ、銃術、ダメ、行軍もかなわない。これでは初年兵の立つ瀬はない。何をやっても通わないのだ。おまけに歩兵操典、作戦要務令、築城教範、軍人勸諭から在郷軍人に賜りたる勸諭まで、どこを聞いてもチャンと覚えていて。こりや、ドエライ所へ入って来た。

これじゃ、軍靴の底をなめさせられても、寝台ぐぐってホウケケキョーとやらされても、柱に登ってミーン、ミーンと嫌の真似をさせられても、一切文句が云えないではないか。

戦闘に出る。古兵殿の勇敢なこと。こっちは頸を縮めて五里霧中、狙い定めずボカンボカンと射っているのに、こちら、どこを向いとる、敵はあっちだ、明後日の方向を射つ

と嗷鳴られてもピンと来ない。はて、何か呼ばれたなあと、古兵殿の前へ前進し不動の姿勢を取っていると、一しきりペチャクチャあったのち、

「こらノストがヒョーズン語で教育しとるのに、どうして返事をせんかッ！」

パチッと、シヤベルのような掌が飛んで来て、白い火花がチカッと光る。馬鹿にしやがって、そんなヒョーズン語がどこの世界にあるうかいの、おみやあの云うこと、てんぎり分らねえ。

「キサマはバカか臍抜けか。ヌド(二度)も云うのに分らんかッ！」

そんなセリフ。ヌドや三度で分つてたまるきやあ。ものを云う時はな、あのよオというんだ。名古屋のあんさまを見損うなよ田舎者。

言葉はその中判りかけたが、その教育の細かいこと。銃の手入れがわるい、手箱の整理がわるい、被服の畳み方がわるい、洗濯の濯ぎ方がわるい、乾し方がわるい、とり入れ方がわるい。わるくないものは一つもない。生きているのも悪い気がする。その上、便所が長い、食事が遅い、駆け足がのろい、早や飯、早やグソ、早や走りは歩兵の表芸だぞと教えられる。

いくら古兵といったって、駆け足なら負けないぞ。百米

奴があるか。その古兵殿、戦闘中急にいなくなつたと思つたら、敵の俘虜を、二個中隊もソロソロ引き連れて帰って来た。どうしてこら、うちの古兵はべら棒に強いのだらう。

「そりやお前、食糧の数が違うヘサ！」

食糧の数が違うと澄ましている。

一期の検閲、二期、三期。野戦の経験も度重なるうちに漸くそれが判つて来た。やはり食糧なのだ。小姑の「標準語」には泣かされ続けたが、叱咤は凡て拳指動作を清潔に、戦闘においては勇敢な軍人に仕立てあげ、しかも敵弾に当らぬ要領を、一つ一つ身をもって教えてくれたのだ。

号令を聞いたら、真っ先に出る。これが古兵の教えであった。一瞬の躊躇があったり、半歩人より遅れようものなら、たとえ戦闘間でも鉄拳の雨が降った。いや、古兵が集って来て、袋叩きの制裁を加えた。

それでいて、夜、寝具をひっかぶって寝ていると、小声で寄って来て、オイ、これサ、食えよと、慢頭を四つ五つ握らせてくれる。泣かせる古兵殿である。

この気風を作りあげたのが東北の古兵。だから三中隊は強かった。例をあげる。橋場隊はのち引地隊となったが、「引」の字の胸章を中国軍は数字の「31」と読み、三十一部隊と聞くと、俄然動揺の色を濃くした。